The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	宋詞研究 : 柳永と『草堂詩餘』
Author(s)	藤原, 祐子
Citation	大阪大学, 2009, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/49428
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

【32】

氏　　名	藤原祐子（ふじわらゆうこ）
博士の専攻分野の名称	博　士（文　学）
学　位　記　番　号	第　２２６１３　号
学位授与年月日	平成21年３月24日
学位授与の要件	学位規則第４条第１項該当 文学研究科文化表現論専攻
学　位　論　文　名	**宋詞研究－柳永と『草堂詩餘』－**
論文審査委員	（主査） 教　授　高橋　文治 （副査） 准教授　浅見　洋二　　教　授　湯浅　邦弘

論文内容の要旨

詞は、8 世紀の中葉頃に起こったとされる歌謡芸術の一つであり、後の宋代には時代を代表する文学ジャンルに成長する。詞は元来歌曲の歌詞であったため、文学ジャンルとして成立した後も歌われる側面と読まれる側面の両面をもったが、本論文は、南宋期に生まれたとされる詞のアンソロジー『草堂詩餘』に着目することによって、元来歌詞であった宋詞がいかに文字化され、そのテクストや書物が後代にどのように受容されたかを論じるものである。全体は六章からなり、第一章は「柳永詞論――その物語性と表現――」、第二章は「『草堂詩餘』の類書的性格について」、第三章は「『草堂詩餘』と書会」、第四章は「『草堂詩餘』と柳永」、第五章は「『草堂詩餘』はどこからきたか」、第六章は「惜春の系譜」と題され、冒頭には「はじめに」が置かれる。

本論文は、詞という文学ジャンルが元来もつ通俗性を明らかにするため、第一章「柳永詞論――その物語性と表現――」においては、まず、『草堂詩餘』にも多数の作品が収録される柳永詞が取り上げられ、その内容・用語が緻密に分析される。柳永詞は当時の口語を多く含み極めて難解であるが、それらの口語表現が、恋愛物語における主人公たちの独白といった「見立て」の中で展開されていることに注目して、柳永詞が、流行歌を制作する「書会」の作に類する性格をもつことが明らかにされる。

ついで、第二章から第五章までは『草堂詩餘』の来歴と受容をめぐる問題が扱われる。まず第二章「『草堂詩餘』の類書的性格について」においては、洪武本『草堂詩餘』の体裁、収録作品、注の内容等が詳細に吟味され、この書物が詞華集というより「類書」に似た性格をもつことが明らかにされる。次の第三章「『草堂詩餘』と書会」においては、元明期の戯曲・小説に引かれる詞が丁寧に拾われ、それらの詞が何を参照して書かれているかが分析される。その結果、通俗文学の作者集団である「書会」は『草堂詩餘』を参考書の一つとしていた可能性があることを指摘する。また、第四章「『草堂詩餘』と柳永」は、『草堂詩餘』が柳永のどのような作品を収録しているかを分析することによって、この詞華集が

そもそもどういう観点から収録作品を取捨選択したかが検討される。同様の観点は次章でも保持され、第五章「『草堂詩餘』はどこからきたか」では南宋の詞人辛棄疾の作品が扱われる。その結果、個人の文集や別集類とは別に、南宋期には詞選集の祖本ともいえる大部な詞選集があって、『草堂詩餘』はそれを参照して編集された可能性があることを指摘する。第六章「惜春の系譜」は一種の余論であり、「惜春」というテーマをめぐって詞がいかなる文学世界を形成したかが論じられる。以上の考察を通じて、本論文は、『草堂詩餘』が何を目的に編纂され、後代にどのように受容されたかという問題の一端を明らかにした。

論文審査の結果の要旨

本論文は、全体としては『草堂詩餘』を論じるものであるが、たとえば第一章で扱われる柳永詞が第二章以下の議論といかなる関係にあるかは必ずしも明瞭ではなく、第六章「惜春の系譜」も第五章までの議論と無関係な余論の観を免れない。また、『草堂詩餘』を扱う第二章から第五章を見ても、その議論は微妙に論点を移しているように見え、本論文全体は必ずしも一貫性をもったものではない。また、論文中に頻用される「類書」等の用語についても、筆者は明瞭な定義を避けて議論を進めており、そのため時に論点が曖昧になる部分がないわけではない。筆者が課題とすべき点は少なくないが、にもかかわらず、本論文は次の諸点において独創性を示し、大きな成果を上げたといえる。

従来の宋詞研究は作家研究や作品研究に大きく傾斜し、詞選集や通俗本が研究の俎上に上されることはなかった。詞選集や通俗本に論及されることがあっても、多くの場合、テキストクリティークの一材料としてしか扱われず、詞選集それ自体がもつ文学史上の意義、文化史上の特徴が明らかにされることはなかった。しかるに本論文は、詞選集が書籍としてもつ情報全体を整理し、その体裁や収録作品、注の内容等を詳細に吟味して、書籍の流布をめぐる社会史的な観点から宋詞研究を見直そうとした。文学資料の資料論的な組み替えを図るこの研究手法は高く評価されてよい。

また本論文は、数ある詞選集の中でも、最も大衆的で通俗的だとされた『草堂詩餘』を選択した。『草堂詩餘』は、南宋期の書目等に著録はあるものの、そこでの記述は現存諸版本との間に多くの矛盾をかかえ、しかも、明代以後に坊刻の俗本が非常に多く出版されたため、版本の系統もきわめて複雑である。しかるに筆者は、『草堂詩餘』のこの通俗性や複雑さに着目し、それらの分析を通して、詞選集が何を目的に編纂され如何に受容されたかを明らかにしようとした。その着眼点のよさ・独創性は高く評価されてよい。

また本論文は、上記の観点から『草堂詩餘』の体裁や収録作品、注の内容等を詳細に吟味し、南宋期以後陸続と出版された百科事典や学習参考書類と『草堂詩餘』が似た形態をとること、『草堂詩餘』が収録する作品とそのテキストには一定の傾向が見られること、戯曲・小説の作者たちが『草堂詩餘』を参照した可能性があること、等を明らかにした。特に、元明期の戯曲・小説に引かれる詞を丹念に分析して、それらの一部が『草堂詩餘』所収の作品の切り貼りであることを立証した部分は白眉であり、「日本中国学会報」に発表された初出論文は 2008 年度の学会賞を受賞している。本論文が明らかにした以上の成果はきわめて高く評価できる。

また、日本ではあまり紹介されることのない詞作品を多く引用し、それらに有用な語注を施して正確な翻訳を付したことも本論文の大きな功績とし得る。特に、口語を多用して難解で知られる柳永詞に的確な解説を付け、その魅力を十分に紹介し得た功績は大きい。

よって、本論文を博士（文学）の学位にふさわしいものと認定する。